せつな系植物楽（しょくぶつがく）

植物ぽろぽろ

絵・文　群馬直美

オニ葉たんぽぽ

「タンポポ戦争」というのがある。図鑑で読んだ。

そもそも日本に野生していたのは、十種のタンポポ。その彼らが、海外からやってきたセイヨウタンポポなどの繁殖に追いやられ、だんだん息を潜めてきている。この様子を、人間の世界になぞらえて「タンポポ戦争」と呼んだのだ。

ゴルフ場のキャディーさんたちも「タンポポ戦争」をしているのだそうだ。……ふわふわ跳ぶ綿毛。ゴルフ場の広い敷地に、どこからともなくどんどん舞い降りてきてしまう。だから、キャディーさんたちは、タンポポを見つけると根こそぎむしりとるのだという。でも、むしってもむしっても、どんどん生えてくる。繁殖力が強いタ

ンポポとキャディーさんたちの戦いは終わることがない。

私の「タンポポ戦争」。……別な人を母親とカンチガイ。共働きの父と母、住み込みのお手伝いさんに兄と私の世話を任せて働いた。もの心つく前の私、てっきりこのお手伝いさんを母親と思ってしまったのだ。その人が突然いなくなった。「お母さんがいない」と泣きじゃくる私。涙の向こうから、それはそれは真剣な母の顔が近づいてきて、言った。

「私がホントのお母さんだよ」

父も言った。

「タンポポの綿毛が耳に入って、耳が聞こえなくなってしまったんだよ」

タンポポお母さんが消えた日、私の「タンポポ戦争」が始まった。

春の野原や道端でタンポポを見かけると、耳を押さえて走って逃げた。そよ風に運ばれてタンポポの綿毛が空を舞う。両耳をしっかり手で押さえながら、タンポポお母さんの

面影を追う。あの人はどこへ行ってしまったんだろう……。同時にあの日の母の顔も、ふわふわ、ふわふわ、運ばれ出て……ふわふわ、ふわふわ、漂うふたつの面影。

通りですれ違った年配の女性。「あっ、タンポポお母さん！」の面影を見て、振り返る。実の母に悪いと思う。タンポポは地中深くまで根をはる。心深くまで根をはってしまった面影に、途惑う。

父も母も、あの日のことを私が憶えているとは、思ってはいない。だから私も、なにもききはしない。

ただ一度。中学生になったとき、その人が逢いたがっていると母に連れられ、祖母の家に行った。そのときの母の神妙な面持ち。まるで我が子を奪われてしまうかのような。母は知っている！　私がその人に思慕の情を抱き続けていることを。……それから何回も春が来て、タンポポの綿毛と一緒に、この想いを少しずつ風に運ばせた。

私は大人になった。葉っぱの絵を描いている。

早春のフランスはノルマンディー。牧歌的な風景の中、ピヨピヨ小鳥がさえずり、遠くで牛が草を食む。日本で見かける牛と違って茶色くて毛むくじゃら。ふと足元に目をやると、タンポポ！　こんなところにも、タンポポお母さんが！　とおもわず葉っぱを一枚戴く。日本で見るのと同じだ。タンポポの花は、朝になると開いて日が沈むと閉じる。西洋では、「牧童の時計」と呼ばれているのだそうだ。もうしばらくしたら、この広いノルマンディーの空の下、タンポポの綿毛が飛ぶだろう……。

真冬、アトリエ階下の自転車置場。たくさんのイカの頭で出来たようなギザギザ葉っぱ。タンポポだ！　いつも見ていたはずなのに、気づかなかった。常緑樹の肉厚な葉と違い、押し葉にしたらぺらぺらになってしまう、か弱く繊細なタンポポの葉。そんなタンポポがこの寒さの中、「希望の春は、いつだってある」と言わんばかりに、堂々と緑！　身を挺して、冷たい地面を暖めてくれている。さすが、タンポポお母さん。母は強いぞ！

タンポポお母さんが消えて、四十回目の春が来た。道端でタンポポの綿毛と出会っても、もう耳を押さえたりはしない。だけどやっぱり、ふわふわとあの面影、ふたつ……。

ふわりふわりと四十年、漂い続けたタンポポの綿毛。思い掛けず舞い降りた。出版社に連絡があったのだ、タンポポお母さんから。すぐ近くに住んでいた。

どきどきしながら、小さな駅の改札口で待った。雨が降っていた。

八十歳だというその人は、改札口に続く階段を上ることが出来るのだろうか……。ふわりと現われたその人は、ちいさなちいさな人だった。身の丈、私の半分くらい。歳をとっても白髪にならない家系なのだと、見事に黒い髪の毛。老いてなお一人暮らしの寂しさも感じさせない、明るく希望に満ちた瞳。タンポポのような人。

そして私は知った。乳飲み子の私を出勤前の母が、いかに甲斐甲斐しく世話をして、その人に毎日ゆだねていったかを。ああ、私は、タンポポお母さんの暖かさと、ずっと一緒にいたんだ！

青空を舞うタンポポの綿毛を見るように、バカみたいに大きくなった私を見上げながら、その人は言った。

「どんな大人になったのかと思って……」

この地球上に、約四百種のタンポポがある。主に北半球の日当たりのよい野原や道端に、彼女らはいる。日本にもおよそ二十二種のタンポポが野生している。そして……。私の心の陽だまりにも、ふたりのタンポポお母さん。

（葉画家）